

当世念仏者無間地獄事

文永元年九月二二日 四三歳

あわの ながさのこおり はなぶさの
安房国・長狭郡・東条花房郷蓮華寺に於て浄円房に対して
あじやり
日蓮阿闍梨之を註す。文永元年^{ゆえ}九月二十二日。

問うて曰く、当世の念仏者無間地獄と云ふ事、其の故如何。答へて云はく、法然の^{せんちやく}選択に就いて云ふなり。

問うて云はく、其の選択の意如何。答へて曰く、後鳥羽院の治天下を治む^{けんにな}建仁年中、日本国に一の彗星出だせり。名を源空法然と曰ふ。選択一卷を記して六十余紙に及べり。科段を十六に分かつ。第一段の意は道^{どう}綽^{しゃく}禅師の安樂集に依つて聖道^{みょうもく}浄土の名目を立つ。其の^{しょうどう}聖道門とは、浄土の三部^{にんのう}経^{こんこうみょう}等を除いて自余の大小乗の一切^{こと}経、殊には朝家^あ歸依の大日^{だにち}経・法華^{ほふわ}経・仁王^{にんのう}経・金光^{こんこう}明^{めい}経等の^あ顯密の諸大乘^{しよだいじやう}経の名目、阿弥^{あみ}陀^だ仏より已外の諸^{しよ}仏・菩薩^{ぼさつ}・朝家^あ御^ご歸依の真言^{まごん}等の八宗^{はっしゆ}の名目之を挙げて聖道門と名づく。此の諸^{しよ}経・諸^{しよ}仏・諸^{しよ}宗は正^{せい}像^{ざう}の機^きに値^あふと雖も末法^{まっぽう}に入りて之を行^いぜん者一人も生死^{しんじ}を離るべからずと云云。又曇鸞^{どんらん}法師^{ぼっし}の往生^{おんじやう}論^{ろん}註^{しゆ}に依つて難^{なん}易^いの二行^{にぎやう}を立つ。第二段の意は善^{ぜん}導^{だう}和尚^{わうじやう}の五部^{ごぶ}九卷^{くわん}の書^{しよ}に依つて正^{せい}雜^{ざく}の二行^{にぎやう}を立つ。其の雜^{ざく}行^{ぎやう}とは道^{どう}綽^{しゃく}の聖道門^{しょうどうもん}の料^{りやう}簡^{けん}の如^{ごと}し。又此の雜^{ざく}行^{ぎやう}は末法^{まっぽう}に入りては往生^{おんじやう}を得^える者^{せんちゆう}の千^{せん}中^{ちゆう}に一も無^なきなり。下の十四段には或は聖道^{しょうどう}・難^{なん}行^{ぎやう}・雜^{ざく}行^{ぎやう}をば小善^{せうぜん}根^{こん}・隨^じ他^た意^い・有^う上^{じやう}功^{こう}徳^{とく}等^{とう}と名づけ、念^{ねん}仏^{ぶつ}等を以ては大善^{だいぜん}根^{こん}・隨^じ自^じ意^い・無^む上^{じやう}功^{こう}徳^{とく}等^{とう}と名づけて、念^{ねん}仏^{ぶつ}に対して末代^{まくだい}の凡^{ぼん}夫^ぷは此^{こゝ}を捨^すてよ、此の門^{かど}を閉^しじよ、之^{こゝ}を閣^{さしお}けよ、之^{こゝ}を抛^{なげう}てよ等の四字^{しじ}を以て之^{こゝ}を制^{しか}止^とす。而るに日本国中の無^む智^ちの道^{だう}俗^{じやく}を始めて大風^{たいふう}に草木^{そうぼく}の従^{したが}ふが如^{ごと}く、皆^{みな}此^{こゝ}の義^ぎに随^{したが}つて、^{たちま}忽^とち^ちに法^{ほふ}華^わ真^ま言^{ごん}等に随^{したが}喜^きの意^いを止^とめ建^{けん}立^りの思^しひを廢^{はい}す。而る間^{かん}人^{にん}毎^{まい}に平^{へい}形^{ぎやう}の念^{ねん}珠^{しゆ}を以て弥^あ陀^だの名^な号^{ごう}を唱^{とな}へ、或は毎日^{まいにち}三^{さん}万^{まん}遍^{べん}・六^{りく}万^{まん}遍^{べん}・十^{じゆ}万^{まん}遍^{べん}・四^し十^{じゆ}八^{ぱつ}万^{まん}遍^{べん}・百^{ひやく}万^{まん}遍^{べん}等^{とう}唱^{とな}ふる間^{かん}又^{また}他^たの善^{ぜん}根^{こん}も無^なく、念^{ねん}仏^{ぶつ}堂^{だう}を造^{ぞう}ること稻^{とう}麻^ま竹^{ちく}葦^いの如^{ごと}し。結^{けつ}句^くは法^{ほふ}華^わ・真^ま言^{ごん}等の智^ち者^{じや}とおぼしき人^{にん}々^々も皆^{みな}、或は歸^き依^いを受けんが為^{ため}、或は往^{わう}生^{じやう}極^{ごく}樂^{らく}の為^{ため}、皆^{みな}本^{ほん}宗^{しゆ}を捨^すて、念^{ねん}仏^{ぶつ}者と成^なり、或は本^{ほん}宗^{しゆ}ながら念^{ねん}仏^{ぶつ}の法^{ほふ}門^{もん}を仰^{おほ}げるなり。

今云はく、日本国中の四衆^{ししゆしゆ}の人々は形^{かたち}は異^いなり替^かはると雖も、意^い根^{こん}は皆^{みな}一^{いつ}法^{ほふ}を行^いじて悉^{ことごと}く西方^{せいぱう}の往^{わう}生^{じやう}を期^きす。仏^{ぶつ}法^{ほふ}繁^{はん}昌^{じやう}の国^{こく}と見^みえたる処^{ところ}に一^{いつ}の大^{だい}なる疑^ぎひを発^おこす事は、念^{ねん}仏^{ぶつ}宗^{しゆ}の龜^き鏡^{きやう}と仰^{おほ}ぐべき智^ち者^{じや}達^{だつ}、念^{ねん}仏^{ぶつ}宗^{しゆ}の大^{だい}檀^{だん}那^なたる大^{だい}名^な小^{せう}名^な並^{なら}びに有^う徳^{とく}の者^{もの}、多^{おほ}分^{ぶん}は臨^{りん}終^{しゆう}思^しふ如^{ごと}くならざるの由^{よし}之^{こゝ}を聞^きき之^{こゝ}を見^みる。而るに善^{ぜん}導^{だう}和尚^{わうじやう}十^{じゆ}即^{じやく}十^{じゆ}生^{じやう}と定^{ぢやう}め十^{じゆ}遍^{べん}乃至^{乃至}一^{いつ}生^{じやう}の間^{かん}の念^{ねん}仏^{ぶつ}者^{しや}は一人^{ひとり}も漏^{ろう}れず往^{わう}生^{じやう}を遂^{すい}ぐべしと見^みえたり。人^{にん}の臨^{りん}終^{しゆう}と善^{ぜん}導^{だう}の釈^{しやく}とは水^{みづ}火^かなり。

爰^{こゝ}に念^{ねん}仏^{ぶつ}者^{しや}会^えして云はく、往^{わう}生^{じやう}に四^し有^{いう}り。一^{いつ}には意^い念^{ねん}往^{わう}生^{じやう}、般^{はん}舟^{しゆ}三^{さん}昧^{まい}経^{きやう}に出^いでたり。

二には正念往生、阿弥陀經に出でたり。三には無記往生、群疑論に出でたり。四には狂乱往生、觀經の^{げぼんげしょう}下品下生に出でたり。詰^なつて曰く、此の中の意・正の二は^{しばら}且く之を置く。無記往生は何れの經論に依^いつて懷感禪師之を書けるや。經論に之無くば信用取り難し。第四の狂乱往生とは引証は觀經の下品下生の文なり。第一に悪人臨終の時、妙法を覚^あれる善知識に値^あふて覚^ある所の諸法実相を説か^あしめて、之を聞^あく者正念存し難く十悪・五逆・具諸不善の苦^せに逼^あめられて妙法を覚^あることを得^あざれば善知識実相の初門と為^ある故に、称名して阿弥陀仏を念^あぜよと云^あふに音^あを揚^あげて唱^あへ了^あんぬ。此は苦痛に堪^あへ難くして正念を失^あふ狂乱の者に非^あざるか。狂乱の者争^あいでか十念を唱^あふべき。例せば正念往生の^{しよしょう}所撰なり。全く狂乱の往生には例^あすべからず。而るに汝等が本師と仰^あぐ所の善導和尚は此の文を受けて^{てんぎょうくしょう}転教口称とは云^あふとも狂乱往生とは云^あはず。其の上汝等が昼夜十二時に祈^ある所の願文に云^あはく「願^あはくは弟子等^{みょうじゅう}命終^{てんとう}の時に臨^あんで心顛倒^{さくらん}せず心錯乱^{あくそう}せず心失念^あせず、身心諸の苦痛無^あく身心快樂^{けらくぜんじょう}禪定^あに入るが如^あし」等云云。此の中に錯乱とは狂乱か。而るに十悪五逆を作^あらざる当世の念仏の上人達、並びに大檀那等の臨終の悪瘡等の諸の悪重病並びに臨終の狂乱^{こころえ}は意^あ得^あざる事なり。而るに善導和尚の十即十生と定め、又定^{じょうとくおうじょう}得^あ往生等の^あ積^あの如^あきは疑^あひ無^あきの^あ処^あ、十人に九人往生すと雖も一人往生せざれば猶^あ不^あ審^あ発^あこるべし。何に況^あんや念仏宗の長者たる善慧・隆觀・聖光・薩生・南無・真光等皆悪瘡等の重病を受けて、臨終に狂乱して死するの由^あ之を聞^あき又^あ之を知^ある。其の已下の念仏者の臨終の狂乱其の数^あを知らず。善導和尚の定^あむる所の十即十生は欠^あけて嫌^あへる所の千中無^あ一と成^ありぬ。千中無^あ一と定められし法華・真言の行者は粗^あ臨終の正念なる由^あ之を聞^あけり。念仏の法門に於^あては正像末の中には末法^{こと}に殊^あに流布すべし。利根鈍根、善人悪人、持戒破戒等の中には鈍根・悪人・破戒等殊^あに往生すべしと見えたり。故に道綽禪師は^{ゆいとうじょうど}唯有淨土一門と書^あかれ、善導和尚は十即十生と定め、往生要集には濁世末代の目足と云^あへり。念仏は時機^す已^あに叶^あへり。行^あぜん者空^{むな}しかるべからざるの^あ処^あに、是くの如^あきの相違は大いなる疑^あひなり。若し之に依^あつて本願を疑^あはゞ仏説を疑^あふに成^ありぬ。進退惟谷^{これきわ}まれり。此の疑^あひを以^あて念仏宗の先達^{せんだつ}並びに聖道の先達に之を尋^あぬるに一人として答^あふる人之無^あし。

念仏者救^あふて云^あはく、汝は法然上人の捨^あ閉^あ閣^あ抛^あの四字を謗^あ法と過^あむるか。汝が小智の及^あばざる所なり。故に上人此の四字を私に之を書^あくと思^あへるか。源曇鸞・道綽・善導の三師の^あ積^あより之を出^あだしたり。三師の^あ積^あも又私に非^あず。源淨土三部經、竜樹菩薩の^{じゅうじゅうび}十住毘婆沙論より出^あず。双觀經の上卷に云^あはく「設^あひ我^あ仏を得^あんに乃至十念」等云云。第十九の願に云^あはく「設^あひ我^あ仏を得^あんに諸の功徳を修^あめ菩提心^あを發^あこす」等云云。下卷に云^あく「乃至一念」等云云。第十八の願成就の文なり。又下卷に云^あはく「其の上輩者、一向專念。其の中輩者、一向專念。其の下輩者、一向專念」云云。此は十九の願成就の

文なり。觀無量壽經に云はく「仏阿難に告げたまはく、汝好く是の語よを持たもて、是の語を持つ者は即ちは無量壽仏の名を持つ」等云云。阿彌陀經に云はく「小善根を以てすべからず乃至一日七日」等云云。先づ双觀經の意は念仏往生・諸行往生と説けども一向專念と云ひて諸行往生を捨ておわ了んぬ。故に彌勒の付嘱には一向に念仏を付嘱し了んぬ。觀無量壽經の十六觀も、上の十五の觀は諸行往生、下輩の一觀の三品は念仏往生なり。仏阿難尊者に念仏を付嘱するは諸行を捨つる意なり。阿彌陀經には双觀經の諸行觀無量壽經の前十五觀つかを束ねて小善根と名づけ往生を得ざるの法と定め畢おわんぬ。双觀經には念仏をば無上功德と名づけて彌勒に付嘱し、觀經には念仏をば芬陀利華ふんだりけと名づけて阿難に付嘱し、阿彌陀經には念仏をば大善根と名づけて舍利弗に付嘱す。終はりの付嘱は一經の肝心を付嘱するなり。又一經の名を付嘱するなり。三部經には諸の善根多しと雖も其中に念仏もつと最もなり。故に題目には無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經等と云へり。釈摩訶衍論しゃくまかえんろん・法華論等の論を以て之を勘かんふるに一切經の初めには必ず南無の二字有り。梵本ほんほんを以て之を言はゞ三部經の題目には南無之有り。双觀經の修諸しゅうしよの二字に念仏より外の八万聖教残るべからず。觀無量壽經の三福九品等の読誦大乘の一句に一切經残るべからず。阿彌陀經の念仏の大善根に対する小善根の語に法華經等漏るべきや。総じて淨土の三部經の意は行者の意樂いぎょうに随はんが為しばらに暫く諸行を挙ぐと雖も、再び念仏に対する時は諸行の門を閉じて捨閉閣抛する事顕然なり。例せば法華經を説かんが為けんがに無量義經を説くの時、四十余年の經を捨てゞ法華の門を開くが如し。竜樹菩薩十住毘婆沙論を造りて一代聖教を難易の二道に分かてり。難行道とは三部經の外の諸行なり。易行道とは念仏なり。經論此くの如く分明なりと雖も震旦しんだんの人師此の義を知らず。唯善導一師のみ此の義を發得せり。所以に双觀經の三輩を觀念法門に書いて云はく「一切衆生の根性不同にして上中下有り。其の根性に随つて仏皆無量壽佛の名を專念することを勧む」等云云。此の文の意は發菩提心・修諸功德等の諸行は他力本願の念仏に値はざりし以前に修する事よと有りけるを、忽たちまちに之を捨てよと云ふとも行者用ふべからず、故に暫く諸行を許すなり。實には念仏を離れて諸行を以て往生を遂ぐる者之無しと書きしなり。觀無量壽經の「仏告阿難」等の文を善導の疏しよの四に之を受けて曰く「上來定散じょうらいじょうさん兩門を説くと雖も仏の本願に望むれば意衆生の一向に專もつぱら阿彌陀の名を稱するに在り」云云。定散とは八万の權實顯密の諸經を尽くして之を撰して念仏に対して之を捨つるなり。善導ほうの法ほう事じ讃さんに阿彌陀經の大小善根の故を釈して云はく「極樂は無為涅槃界なり。隨縁ぞうぜんの雜善恐らくは生じ難し。故に如来要法を選んで教へて彌陀專修を念ぜしむ」等云云。諸師の中に三部經の意を得たる人は但ただ導一人のみなり。如来の三部經に於ては是くの如く有れども正法・像法の時は根機なお猶利根の故に諸行往生の機も之有りけるか。然るに機根衰へて末法と成る間、諸行の機ようや漸うく失せ念仏の機と成れり。更に阿彌陀如来は善導和尚と生

まれて震旦に此の義を顕はす。和尚日本に生まれて初めは叡山に入って修行し、後には叡山を出でて一向に専修念仏して三部經の意を顕はし給ひしなり。汝捨閉閣拋の四字を謗法と過むること未だ導和尚の釈並びに三部經の文を窺はざるか。狗の雷を齧むが如く地獄の業を増す。汝知らずんば浄土家の智者に問へ。

不審して云はく、上の所立の義を以て法然の捨閉閣拋の謗言を救ふか。実に浄土の三師並びに竜樹菩薩、仏説により此の三部經の文を開くに、念仏に対して諸行を傍と為す事粗經文に之見えたり。經文に嫌はれし程の諸行、念仏に対して之を嫌はんこと之過むべきに非ず。但不審なるの処は双觀經の念仏已外の諸行、觀無量壽經の念仏以外の定散、阿彌陀經の念仏の外の小善根の中に法華・涅槃・大日經等の極大乘經を入れ、念仏に対して不往生の善根ぞと仏の嫌はせ給ひけるを竜樹菩薩三師並びに法然之を嫌はゞ何の失有らん。但し三部經の小善根等の句に法華・涅槃・大日經等入るべしとも覚えざれば三師並びに法然の釈を用ひざるなり。無量義經の如きは四十余年未顕眞実と説き、法華八箇年を除きて以前四十二年に説く所の大小権実の諸經は、一字一点も未顕眞実の語に漏るべしとも覚えず。如之四十二年の間に説く所の阿含・方等・般若・華嚴の名目之を出だせり。既に大小の諸經を出だして生滅無常を説ける諸の小乘經を阿含の句に撰し、三無差別の法門を説ける諸大乘經を華嚴海空の句に撰し、十八空等を説ける諸大乘經を般若の句に撰し、彈呵の意を説ける諸大乘經を方等の句に撰す。是くの如く年限を指し經の題目を挙げたる無量義經に依つて法華經に対して諸經を嫌ひ、嫌へる所の諸經に依れる諸宗を下すこと天台大師の私に非ず。汝等が浄土の三部經の中には念仏に対して諸行を嫌ふ文は之有れども、嫌はるゝ諸行は浄土の三部經よりの外の五十年の諸經なりと云ふ現文は之無し。又無量義經の如く阿含・方等・般若・華嚴等をも挙げず。誰か知る、三部經には諸の小乘經並びに歴劫修行の諸經等の諸行を仏小善根と名づけ給ふと云ふ事を。左右無く念仏よりの外の諸行を小善等と云へるを法華・涅槃等の一代の教なりと打ち定めて捨閉閣拋の四字を置いては、仏意に乖くらんと不審する計りなり。例せば王の所從には、諸人の中、諸国の中の凡下等一人も残るべからず。民が所從には、諸人諸国の主は入るべからざるが如し。誠に浄土の三部經等が一代超過の經ならば、五十年の諸經を嫌ふも其の謂はれ之有りなん。三部經の文より事起こりて一代を撰すべしとは見えず。但一機一縁の小事なり。何ぞ一代を撰して之を嫌はん。三師並びに法然此の義を弁へずして、諸行の中に法華・涅槃並びに一代を撰して末代に於て之を行ぜん者は千中無一と定むるは、近くは依經に背き遠くは仏意に違ふ者なり。但し竜樹の十住毘婆沙論の難行の中に法華・眞言等を入ると云ふは論文に分明に之有りや。設ひ論文に之有りとも慥かなる經文之無くば不審の内なり。竜樹菩薩は権大乘の論師たりし時の論なるか、又訳者の入れたるかと思得べし。其の故は仏は無量義經に四十余年は難

行道、無量義經は易行道と定め給ふ事金口の明鏡なり。竜樹菩薩の記文に当たりて出世し諸經の意を演ぶ。豈仏説なる難易の二道を破って私に難易の二道を立てんや。随って十住毘婆沙論の一部始中終を開くに、全く法華經を難行の中に入れてたる文之無し。只華嚴經の十地を釈するに、第二地に至り畢って宣べず。又此の論に諸經の歴劫修行の旨を擧ぐるに、菩薩難行道に墮し、二乘地に墮して永不成仏の思ひを成す由見えたり。法華已前の論なる事疑ひ無し。竜樹菩薩の意を知らずして、此の論の難行の中に法華・真言を入れたりと料簡するか。浄土の三師に於ては、書釈を見るに難行・雜行・聖道の中に法華經を入れたる意粗之有り。然りと雖も法然が如き放言の事之無し。加之仏法を弘めん輩は、教・機・時・国・教法流布の前後を検ふべきか。

如来在世に前の四十余年には大小を説くと雖も説時未至の故に本懷を演べ給はず。機有りとは雖も時無ければ大法を説き給はず。靈山八年の間誰か機にあらざるも、時來たる故に本懷を演べたまふに権機移りて実機と成る。法華經の流通並びに涅槃經には、実教を前とし権教を後とすべきの由見えたり。在世には実を隠して権を前にす、滅後には実を前として権を後と為すべし。道理顯然なり。然りと雖も天竺国には正法一千年の間は外道有り、一向小乗の国有り、又一向大乘の国有り、又大小兼学の国有り。漢土に仏法渡りても又天竺の如し。日本国に於ては外道も無く小乗の機も無く唯大乘の機のみ有り。大乘に於ても法華よりの外の機無し。但し仏法日本に渡り始めし時、暫く小乗の三宗、権大乘の三宗を弘むと雖も桓武の御宇伝教大師の御時、六宗の情を破りて天台宗と成りぬ。俱舍・成実・律の三宗の学者も彼の教への如く七賢三道を経て見思を断じ二乗と成らんとは思はず。只彼の宗を習って大乘の初門と為し、彼の極を得んとは思はず。権大乘の三宗を習へる者も五性各別等の宗義を捨て、一念三千・五輪等の妙觀を窺ふ。大小権実を知らざる在家の檀那等も一向に法華・真言の学者の教へに随って之を供養するの間、日本一洲は印度震旦には似ず一向純円の機なり。恐らくは靈山八年の機の如し。之を以て之を思ふに浄土の三師は震旦権大乘の機に超えざらん。法然に於ては純円の機、純円の教、純円の国を知らず。権大乘の一分たる觀經等の念仏を、権実をも弁へざる震旦の三師の釈、之を以て此の国に流布せしめ、実機に権法を授け純円の国を権教の国と成し、醍醐を嘗むる者に蘇味を与ふるの失誠に甚だ多し。

日蓮花押